

満洲文字の文字表をめぐって(8)

—s と ś、t と d、c と j と y—

吉池孝一 中村雅之

はじめに

中村：まず前回の議論を簡単に振り返っておきましょう。「満文原檔」の無圏点満文には fi という音連続に相当する文字連続はなく、bi で表記します。なぜこのような現象がおこるのか、大きな問題でした。当初は以下二つの可能性を検討しました。

- ① 「満文原檔」の無圏点満文と有圏点新満文とでは、方言が異なっていてそれが反映した。
- ② 同一方言内に存在する異読(文章語音と口頭語音、老人の発音と若者の発音などの違い)に起因する。

①の方言の違いや②の異読による違いを支持する決め手は見つからず、金代と明代の女真語の bi, pi, fi の出かたを確認してみようということになりました。

吉池：明代女真語を『女真館訳語』の「雑字」によってみると bi と fi の音連続があり、有圏点新満文と同様です。pi については資料の制限により見出すことができないが明代女真語にもあったものと想定して無理はないとしました。金代女真語を史書などの漢字音写によってみると、無声有気の漢字 [pʰ] が使用されており、それが明代女真語の f に対応することより、金代女真語の p は明代女真語で f に変化したというこれまでの説を確認しました。明代女真語と有圏点新満文 bi, pi, fi の状況がほぼ同じであるからには、無圏点満文の基礎方言における状況も同様に音として bi, pi, fi があった。しかし、無圏点満文の作者が参照した、モンゴル語文に pi, fi を表記するための文字連続がなかったため、bi という文字連続で、満洲語音 bi のほかに pi, fi をも表記した、と想定しました。

有圏点満文において、p という音を表記するために、文字 b に変形を加え文字 p を作成し pi を表記した。また、無圏点満文においては、満洲語の fi を表記するための wi という文字連続がなかったため、モンゴル文字の bi で満洲語の fi を表記したわけですが、有圏点満文の文字改革において、ᠪ w と ᠪ i を利用して文字連続の ᠪ wi-、ᠪ -wi-、ᠪᠢ -wi を作り出し、それを利用して満洲語の fi を表記した、というのが我々の考えでした。

中村：以上を要するに、無圏点満文の「原資料」たるモンゴル語文において「fi」を表しうる (wi のような) 綴りがなかったため、無圏点満文でもそれを用いなかったということになります。pi > fi の変化を清初の短期間に想定することが明代女真語の例と符合しない以上、早田氏が想定するような音声の問題ではなく、つづり字作成における方針の問題なのではないかということでした。

さて、今回は満洲文字の文字表の続きを検討するということでしたね。

「満文原檔」無圈点満文の s と š

吉池：いま『満文原檔』（2005年）所収の荒字檔、晟字檔、洪字檔（一部）により文字表を作成し、それに対する廣祿・李學智(1970)(1971)¹のローマ字転写を対応させると次のとおりです²。

表1. 「満文原檔」無圈点満文の s と š

有圈点新満文の ローマ字	有圈点新満文に対応する無圈点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
s			
š			

中村：「満文原檔」の無圈点満文には s と š の字形上の区別はありませんね。それほど規範化が進んでいない「世俗的な（非宗教的な）」文献とされる「満文原檔」所収のモンゴル語文はどのようでしょう。

吉池：「満文原檔」所収のモンゴル語文を栗林均・海蘭(2015)³によって確認すると次のとおりです。

¹ 廣祿・李學智(1970)(1971)『清太祖朝老満文原檔（第一册荒字老満文檔册）（第二册晟字老満文檔册）』（中央研究院歴史語言研究所專刊之五十八）臺灣：中央研究院歴史語言研究所、中華民國五十九年及び六十年。『旧満洲檔』の、荒字晟、檔字檔、洪字檔（一部）の無圈点満文を、有圈点満文のメレンドルフ式ローマ字翻字を利用して転写したもの。

² この文字表は、「満文原檔」中の荒字檔、晟字檔、洪字檔（一部）により作成したものであるが、この三種の檔册よりも適した檔册がある。理由は次のとおりである。荒字檔、晟字檔、洪字檔（一部）は高麗紙に書写された天聰元年以降のものであるから、場合によっては有圈点文字が作られたとされる天聰6年（1632）以降に書写された可能性もある。それに対して、明代の公文書を再利用して書写した檔册部分は天聰元年以前に書写された可能性が高い。理想としては、明代公文書を再利用した檔册によるべきである。今回そうしなかったのは、荒字檔、晟字檔、洪字檔（一部）の無圈点満文は既に廣祿・李學智(1971)によってローマ字転写がなされているため、第一段階の作業として、この三種の檔册を利用して進めると便利であるからである。今後は明代公文書を再利用した檔册の状況を確認する必要がある。早田輝洋(2011a)にも、荒字檔、晟字檔、洪字檔（一部）によった子音文字表がある。われわれの表のまとめ方とはやや異なる。なお、早田氏の表は女性子音字 k, g, h と m の末位の字を挙げるが、われわれは見つけることができなかったので「未見」とした。

³ 栗林均・海蘭(2015)『『満文原檔』所収モンゴル語文書の研究』（東北アジア研究センター報告第17号）東北大学東北アジア研究センター。

	頭位形	中位形	末位形
s		ᠰ	ᠰ ᠰ
ᠰ	ᠰ	ᠰ	

中村：この表によると、モンゴル語文ではᠰの中位形の右に2点を付した字形があり、sとᠰは区別されます⁴。もしも無圏点満文の「原資料」たるモンゴル語文がこのようであったとしたならば、表1の無圏点満文とは合わないわけですが、モンゴル語文における実例はどのようなでしょう。

吉池：実例は次のとおりです。

① 後代のᠰがsとなっており、ᠰとsの区別がないもの

Šar (地名) 1例 (97頁)、šaġin (宗教) 1例 (181頁)、šasin (宗教)⁵2例 (191頁)

② 後代のᠰがᠰであり、sと区別があるもの

Tangšai (人名) 1例 (137頁)

中村：①によると、語頭でᠰとsの区別がなくsで表記されることがわかります。②によると、語中でᠰが使用されるのはこの文書全体の中で1例だけです。もしも語中のᠰの出現頻度が極めて低いとなると、このようなモンゴル語文に接した無圏点満文の作者は、語頭、語中を通してただ一つのsで表記した、ということはありません。

吉池：栗林均・海蘭(2015)によって「満文原檔」中にあるモンゴル語文をみると、各行の長い短いは不揃いですが、全部で401行のモンゴル語文を得ることができます。その中で、語中にᠰを含む語は先に挙げたように1例のみですから、文字ᠰが無圏点満文の正書法に与えた影響は無視し得る程度のものでしょうか、他の世俗的なモンゴル語文における文字ᠰの出現状況を調査する必要がありそうです。これは今後の課題ですね。

さて、有圏点新満文は次のように両者を区別しますが、ᠰに相当する字形はモンゴル語文と異なります。

⁴ 栗林均・海蘭(2015)の解説によると、「古典式モンゴル文語では、子音字<ᠰ>は文字の右側に2つの点を付すことによって子音字<s>と区別される。「文書」【「満文原檔」所収のモンゴル語文：対談者注記】では、子音字<ᠰ>は頭位では点が付されず、子音字<s>と同じ形で現れる。「文書」に末位形は現れない。」(27頁)。

⁵ Lessing, F. D. et al. 1995. *Mongolian-English Dictionary*. third reprinting. Bloomington (初版は1960)によると、šaġin (宗教) と šasin (宗教) の両形がある。

・有圈点新満文⁶。

翻字と発音	頭位形	中位形	末位形
s[s]			
š[š]			(稀)

中村：「満文原檔」所収のモンゴル語文は右に2点を付すけれども、有圈点新満文は左に一画付します。一画を付して、新たな文字を作るというのは有圈点新満文の新文字作成の方針に沿ったものと言うことができそうです。

「満文原檔」無圈点満文の t と d

吉池：「満文原檔」の無圈点満文の t と d の頭位形、中位形、末位形は表 2 のとおりです。

表 2. 「満文原檔」無圈点満文の t と d

有圈点新満文の ローマ字	有圈点新満文に対応する無圈点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
t, d +a, i, o			
+e, u, (ū)			
	※頭位では二種の字形が区別なくでる		

*中位形には後続の母音を付したものと付さないものがあるが、これは子音字を自然に抽出するための便宜的な措置。











中村：頭位形の t, d は、後続の母音としてどのようなものが来るかに関わらず、それぞれ二種の字形があります。左側の字は一筆の長丸で、右側の字は縦線と半円のように見えますが、表 2 はこのような二種の字形を意図的に採取して並べたということですね。



二種の t と d



吉池：はい。一筆の長丸の字形（表 2 の左側）と、左縦線と右半円の字形（表 2 の右側）ですが、無圈点満文ではこの違いは意味を持ちません。そのことを明示するために二種の字形を並べました。しかし、有圈点新満文では、「長丸の字形+母音 a, i, o」、「左縦線と右半円の字形+母音 e, u, ū」のように、両者は区別して用いられます。いま有圈点新満文の文字表



⁶ 吉池孝一(2022)「満洲字の文字表」『KOTONOHA』第 235 号(2022 年 6 月)、1-7 頁。以下においても有圈点新満文の表はこれによる。



から t と d の字形を取り出すと次のとおりです。

翻字と発音	頭位形	中位形	末位形
t [tʰ]	 a, i, o の上	 a, i, o の上	
	 e, u, ū の上	 e, u, ū の上	
		 子音の上	
d [dʰ]	 a, i, o の上	 *a, i, o の上	
	 e, u, ū の上	 e, u, ū の上	

中村：有圈点新満文の  は、無圈点満文の「長丸の字形」から発展した字形、有圈点新満文の  は、無圈点満文の「左縦線と右半円の字形」から発展した字形と言ったほうがいいでしょう。

 は、 とくらべると、左縦線の上部が突き出ています。この突き出た部分は、一画を付して新たな文字を作るという有圈点新満文の新文字作成の方針に沿ったものと言えます。

吉池：表 2. 「満文原檔」無圈点満文の中位形は、どの母音の前でも違いはありません。それに対して、有圈点新満文では、+a, i, o と +e, u, ū とでは区別があります。

中村：の方は と同様に、斜め下に降る線が突き出ており、この突き出た部分は、一画を付して（これには線の延長なども含む）新たな文字を作るという有圈点新満文の新文字作成の方針に沿ったものです。

吉池：大雑把に言えば、女性母音と結合する際に、「プラス一画」の字形が用いられるということですね。「ka, ko, kŭ」と「ke, ku, ki」の k（および g, h）の場合と比べると、結合する母音が少し異なるので混乱しそうです。

中村：確かに違いますね。k, g, h の場合には、子音の調音点の違いが裏付けとなってつづりが異なっていたのですが、t, d の場合には、モンゴル文字や無圈点満文で区別していなかった「ta, te, da, de」あるいは「to, tu, do, du」を区別するための便宜的な手段として子音の字形に区別を設けたわけです。結果として、「ta」と「te」のような母音の違いを子音の字形の異なりで区別するということになってしまいました。この辺りは初学者が最も戸惑うところでしょうね。

「満文原檔」無圈点満文の c と j と y

吉池：「満文原檔」の無圈点満文の c と j と y の頭位形、中位形、末位形は次の表 3 のとおりです。

表 3. 「満文原檔」無圈点満文の c と j と y

有圈点新満文の ローマ字	有圈点新満文に対応する無圈点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
c			
j			
y			

- * j の中位形 (𐩪) の () は使用例が少ないことを示す。
- * 単語の末尾 (音節末に相当) に c, j, y が立つ末位形は無い。

中村：𐩪 の出方が複雑ですね。「満文原檔」所収のモンゴル語文はどのようでしょう。

吉池：栗林均・海蘭(2015)によると次のとおりです。

	頭位形	中位形	末位形
č			
j			
y			







*【対談者注記】j, y の末位形は、j, y に後続する母音 a, e が分離して書かれるときの字形であり、満洲文字の検討には関わらないので、以下においては言及しない。

第 31 文書の č, j の字形—B 型

中村：č の頭位形 と、č, j の中位形 は同一の文字を想定したように見えますね。






吉池：「満文原檔」所収のモンゴル語文は、47 の文書 (檔案) からなるわけですが、栗林均・海蘭(2015)の表は 47 の文書に出現する文字をまとめたものです。私は č, j の字形のような複雑なものは、文書ごとに見た方が、実態が明瞭になると思っています。文書ごとに“書き手”が異なるかもしれず、ときに習慣から逸脱した字形を書く書き手もいないとも限りません。






中村：具体的にはどういうことでしょうか。

吉池：この表の中位形の  ですが、左の縦線が短い字形の代表として表に掲載したものでしょう。しかし実はこの字形、第 31 文書に現われるもので、中位形ではなく、初頭の字形です。もっとも、他の文書の中位形に  と類似したものがあり、それらを代表させてこの字形を使用したのでしょうか。しかし厳密に言えば、この字形を中位形に置くのは不都合です。いま、第 31 文書の  (以下  で表記する) と  (以下  で表記する) の出方をみると次のとおりです。なお第 31 文書には、長短が異なる行が 10 行あります。



3 行目 Čaqar(人名) 4 行目 Čaqar(人名) 5 行目 Čaqar(人名)




中村：これをみると左の縦線が短い  は、 に相当するとみてよさそうです。頭位の  はすべて 、 でしょうか。






吉池：第 31 文書の頭位の  には、次のように、 とする字形もあります。頭位の  は  と  を合わせて、すべてで 6 例です。



7 行目 Čaqar(人名) 3 行目 čerig(兵) 6 行目 čerig(兵)







中村：中位の 、 の字形はどのようでしょう。

吉池：第 31 文書の 、 の中位の字形はすべて  となります。以上確認した字形によって第 31 文書の状況を表示すると次のようになります。これを B 型と呼んでおきます。

	頭位形		中位形	
č				
ĵ				

中村：第 31 文書を B 型と呼ぶとなると、別に A 型を想定しているわけですね。

第 10 文書の 、 の字形—A 型

吉池：第 10 文書も 10 行よりなります。微妙な字形で判断が困難なものもありますが、 の頭位と  の中位は、 ではなく、すべて  です。なお、 の頭位はすべて  です。

中村：「微妙な字形で判断が困難なものもある」とはどういうことでしょうか。

吉池：第 10 文書の 9 行目に次の一文があります。モンゴル語文を横に倒して提示します。ローマ字転写と日本語の意味は栗林均・海蘭(2015)を参照しました。



čögečilejü irejü jöyaǰü qari..
 人数を減らして 来て 会って 帰れ。

中村：č, j の頭位、中位がこの一文に収まっていますね。irejü の j は であり、これは先の第 31 文書で、頭位の č として出てきた に類似しています。第 31 文書ではこの を があるとしましたが、irejü の はどうか。

上の一文に動词语尾の jü が 3 つ出てきます。irejü () の前にある Čögečilejü の jü も、後にある jöyaǰü の jü も、ともに です。その間にある irejü の j を と書くとは思えません。irejü の も、 の異形とみるのが自然でしょう。

吉池：第 10 文書の書き手には、 の左の丸みを平に書く傾向があることは見て取れます。それは jöyaǰü の jü にも表れています。そのような書き癖を契機として のような が出たと考えていいのでしょうか。第 10 文書に中位の j は 9 例ありますが、 のように、 に類似したものは、この 1 例のみです。 の異形とみていいのでしょうか。

「満文原檔」所収のモンゴル語文の 47 の文書はすべて手書きですので、筆勢により、書き手の意図とは異なって見える字形となることがあっても不思議ではありません。

中村： に類似した字形が、何を意図したものであるかは、それぞれの文書全体をみて判断すべきであるということですね。 に類似した字形は、第 31 文書では を意図したものの実現であり、第 10 文書では を意図したものの実現であるということでしょう。

吉池：以上の議論に誤りが無いとしたら、第 10 文書の č, j の字形は次のようになります。じつは、このように が無い文字の体系を有する文書が、47 の文書の表記法の大勢です。これを A 型と呼んでおきましょう。

	頭位形	中位形	
č			
j			

中村：A 型が基本の表記法で、その A 型の頭位の一部に がでるものを B 型と呼ぶということですね。第 10 文書が A 型で、第 31 文書が B 型というのはわかりました。47 のそれぞれ

の文書の状況はどのようでしょう。

47 の文書における ě, j の字形の型

吉池：47 のそれぞれの文書の型は次のようになります。各文書の年号は栗林均・海蘭(2015)に依ります。型は、A 型と B 型に加えて、【その他】を設けます。頭位の ě を持つ語が無い文書の場合は（頭位の ě 無し）とします。

第 1 文書〔天命 6(1621)年 7 月〕 3 行。A 型。（頭位の ě 無し）

第 2 文書〔天命 8(1623)年 7 月 3 日〕 7 行。B 型。

第 3 文書〔天命 8(1623)年 7 月 4 日〕 8 行。B 型。

第 4 文書〔天命 11(1626)年 6 月 6 日〕 18 行。A 型。

第 5 文書〔天命 11(1626)年 7 月 6 日〕 8 行。A 型。

第 6 文書〔天命 11(1626)年 8 月 17 日〕 7 行。A 型。（頭位の ě 無し）

第 7 文書〔天聰 3(1629)年 10 月 29 日〕 5 行。A 型。tonuĵu(第 4 行)の ĵ は 𐰸 と類似。（頭位の ě 無し）

第 8 文書〔天聰 3(1629)年 11 月 7 日〕 6 行。A 型。

第 9 文書〔天聰 4(1630)年 正月 9 日〕 9 行。A 型。（頭位の ě 無し）

第 10 文書〔天聰 4(1630)年 2 月 1 日〕 10 行。A 型。ireĵü(第 9 行)の ĵ。𐰸 と類似。前節で言及。

第 11 文書〔天聰 4(1630)年 4 月 2 日〕 4 行。A 型。（頭位の ě 無し）

第 12 文書〔天聰 4(1630)年 4 月 4 日〕 7 行。B 型。

第 13 文書〔天聰 5(1631)年 正月 13 日〕 4 行。B 型。

第 14 文書〔天聰 5(1631)年 4 月 7 日〕 9 行。A 型。

第 15 文書〔天聰 5(1631)年 4 月 12 日〕 30 行。B 型。ömċi(第 3 行)中位の ċ は微妙な字形であるが 𐰸 と判断。

第 16 文書〔天聰 5(1631)年 4 月 11 日〕 9 行。【その他】。第 3 行目の頭位の ċ と中位の ċ, j は 𐰸。それ以外の行では、頭位の ċ と中位の ċ, j は、すべて 𐰸。

第 17 文書〔天聰 5(1631)年 4 月 11 日〕 4 行。A 型。

第 18 文書〔天聰 5(1631)年 4 月 20 日〕 3 行。A 型。（頭位の ě 無し）

第 19 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 5 日〕 5 行。A 型。

第 20 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 5 日〕 6 行。B 型。

第 21 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 5 日〕 5 行。A 型。

第 22 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 5 日〕 3 行。A 型。

第 23 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 9 日〕 6 行。A 型。

第 24 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 9 日〕 7 行。A 型。bordaĵu(第 6 行)の中位の ĵ は 𐰸 と類似するが 𐰸 と判断。

第 25 文書〔天聰 5(1631)年 7 月 9 日〕 3 行。A 型。

- 第26文書〔天聰5(1631)年7月19日〕11行。A型。
- 第27文書〔天聰5(1631)年11月19日〕11行。B型。
- 第28文書〔天聰5(1631)年11月28日〕6行。【その他】。A型を基本とするが、頭位と中位の c に、角がやや丸みを帯びた c が出る。 c とするか c とするか判断が困難なものが複数ある。
- 第29文書〔天聰5(1631)年12月11日〕3行。【その他】。頭位の c と中位の c, j に多数の c が出る。ただし c の左縦線が短くなる傾向がある。
- 第30文書〔天聰5(1631)年12月21日〕11行。【その他】。頭位の c と中位の c, j に多数の c が出る。ただし c の左縦線が短くなる傾向がある。
- 第31文書〔天聰6(1632)年正月3日〕10行。B型。čaqar(4行目)のčは c であるが c に相当。前節で言及した。
- 第32文書〔天聰6(1632)年正月24日〕12行。A型。
- 第33文書〔天聰6(1632)年正月18日〕22行。【その他】。A型を基本とするが、中位の c, j を c とするものが少なくない。ただし c の左縦線が短くなる傾向がある。
- 第34文書〔天聰6(1632)年2月2日〕6行。A型。
- 第35文書〔天聰6(1632)年3月27日〕4行。A型。
- 第36文書〔天聰6(1632)年3月29日〕3行。A型。
- 第37文書〔天聰6(1632)年4月6日〕8行。【その他】。B型を基本とするが、中位の c, j を c とするものが少なくない。
- 第38文書〔天聰6(1632)年10月5日〕47行。B型。ただし、中位の c, j に少数であるが c とするか c とするか判断が困難なものがある。 c の角がやや丸みを帯びた字形のため。
- 第39文書〔天聰9(1635)年5月27日〕10行。【その他】。A型を基本とするが、Sečen(3行目)の中位の c を c とする。
- 第40文書〔天聰9(1635)年5月27日〕11行。A型。ただし čiddam(1行目)の頭位の c 不明瞭であるが c に見えないこともない。
- 第41文書〔天聰9(1635)年7月24日〕9行。【その他】。B型を基本とする。頭位と中位の c を c とするものがある。
- 第42文書〔天聰9(1635)年12月7日〕11行。B型。
- 第43文書〔天聰10(1636)年2月2日〕9行。【その他】。B型を基本とするが、頭位と中位の c を c とするものがある。
- 第44文書〔天聰10(1636)年2月2日〕3行。【その他】。A型を基本とする。(頭位の c 無し) 中位の c を c とするものが1例ある。
- 第45文書〔天聰10(1636)年2月2日〕3行。【その他】。B型を基本とする。頭位と中位の c を c とするものがある。
- 第46文書〔天聰10(1636)年2月2日〕3行。【その他】。B型を基本とする。頭位と中位の c を c とするものがある。
- 第47文書〔天聰10(1636)年2月2日〕2行。【その他】。B型を基本とする。頭位と中位の c を c

とするものがある。

第 41 文書から第 47 文書の č, j の表記法

中村：A 型、B 型、【その他】の一覧表をみると、A 型と B 型が大半を占めます。【その他】の中にも A 型を基本として一部に他の特徴を加味したものがあります。このようにみると、A 型と B 型を、当時のモンゴル語文（厳密には「満文原檔」所収のモンゴル語文）の表記法の体系の大勢としていいのでしょうか。

興味深いのは、【その他】の中の第 41 文書から第 47 文書です（第 42 文書は除く）。「頭位と中位の č を 𐠨 とするものがある」、すなわち、č の頭位と中位にのみ 𐠨 が出るというのは、次に挙げるように、有圈点新満文の表記法と同じです。また、現代のモンゴル文字の表記法とも同じです。これをどのように考えたらいいか……。

・有圈点新満文

	頭位形	中位形
c[tʂ, tʃ]	𐠨	𐠨
j[dʒ, dʒ]	𐠨	𐠨

・現代のモンゴル文字⁷

	頭位形	中位形	
12	č	𐠨	𐠨
13	ǰ	𐠨	𐠨

吉池：第 41 文書から第 47 文書（第 42 文書は除く）の表記法は、B 型（頭位の j は 𐠨。頭位と中位の č, j は 𐠨 とするが、頭位の č に 𐠨 が出る場合がある）が基本で、それ以外に、中位の č を 𐠨 とするものがあるというものです。「頭位と中位の č を 𐠨 とする」というのは、たしかに有圈点新満文と同じ表記法です。第 41 文書～第 47 文書（第 42 文書は除く）は、天聰 9(1635)～天聰 10(1636)年の文書として、まとまって同一の特徴を持つわけですが、これをどのように考えるかということですね。

中村：有圈点新満文が作られたとされるのは天聰 6(1632)年正月です。第 41 文書～第 47 文書は有圈点新満文の後に作られたものですから、年代からみて、有圈点新満文の表記法の影響を受けた書き手によってと見てもおかしくはありません。

⁷ 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林。9 頁による。

吉池：第 41 文書～第 47 文書（第 42 文書は除く）は有圈点新満文と同じ特徴を持つ。しかも年代としてまとまっている。このことについて、有圈点新満文の表記法の影響を受けたとみるならば、無理なく理解することができます。ほかに不都合な資料が出てくるまではそのように考えておきましょう。

モンゴル文字の ċ, j の表記法の変遷

中村：ところで、現代のモンゴル文字の ċ, j の表記法も、「満文原檔」所収のモンゴル語文と同様に、有圈点新満文の表記法と同じです。そこで、上で確認したように「満文原檔」所収のモンゴル語文が有圈点新満文の影響を受けたとなると、現代のモンゴル文字も、有圈点新満文の影響を受けて成立したと考えたくなりますね。

吉池：モンゴル文字の ċ, j の表記法の推移を理解することは簡単ではなさそうです。先古典期モンゴル語によって書かれたとされるモンゴル語訳『孝経』の字母をみると次のようです。

①モンゴル語訳『孝経』⁸

		頭位形	中位形		
16	č	ᠴ	a) ᠴᠠᠨᠢ b) ᠴᠢ		
17	j	ᠵ	a) ᠵᠠᠨᠢ b) ᠵᠢ		ᠵ
18	y	ᠶ	ᠶ	ᠶ	

*č の中位形は a) (後の 𠰪 に相当する) が主で、b) (後の 𠰪 に相当する) が従。

*j 中位形は a) (後の 𠰪 に相当する) が主で、b) (後の 𠰪 に相当する) が従。

②「満文原檔」所収のモンゴル語文 (先に検討したもの)

A 型

	頭位形	中位形	
č	ᠴ	ᠴ	
j	ᠵ	ᠵ	

B 型

	頭位形	中位形	
č	ᠴ	ᠴ	ᠴ

⁸ 吉池孝一(2006)「蒙文孝経の字母表」『KOTONOHA』第 38 号 (2006, 1, 30) 17-20 頁。吉池孝一・中村雅之・長田礼子(2021)『蒙古語表記史論考』古代文字資料館所収。

ᠵ	ᠵ		ᠵ	
---	---	--	---	--

③現代モンゴル文字⁹

		頭位形	中位形
12	ᠴ	ᠵ	ᠵ
13	ᠵᠵ	ᠵ	ᠵ

中村：①モンゴル語訳『孝経』の頭位形のᠴは、すべて「後のᠵ」に当るものでしょうか。

吉池：『孝経』の頭位形のᠴは合計51例あります。その内、「後のᠵ」に相当するものは48例で、「後のᠵ」に相当するものは1例（20b7のᠴoγ）、どちらであるか微妙なものが2例（37b5の2つのᠴay）です。

中村：『孝経』では頭位形のᠴはほぼ全て「後のᠵ」に相当するということですね。そうすると、②の「満文原檔」所収のモンゴル語文のA, B型の頭位形のᠴはᠵが主なので、両者はまったく異なります。①『孝経』のような表記法から、②「満文原檔」所収のモンゴル語文の表記法が出たとは考えにくい。それが③現代モンゴル文字になると、元に戻って、頭位形のᠴは、①『孝経』と同様になる。なかなか複雑ですね。

吉池：先に「満文原檔」所収モンゴル語文の第41文書～第47文書のᠴ, ᠵの表記法は有圈点新満文の影響によって生じたと思いました。それはいいとして、現代モンゴル文字のᠴ, ᠵの表記法の成立については、①モンゴル語訳『孝経』のような表記法があるとすると、有圈点新満文との関係を議論することは軽々にはできません。モンゴル文字のᠴ, ᠵの表記体系の推移については、われわれにとっては今後の課題とせざるを得ないようです。またᠴ, ᠵの文字自体も①から③までをみるとだいぶ変容しているようなので¹⁰、字形についても今後の課題として、先にすすみたいと思うのですがいかがでしょう。

⁹ 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林。

¹⁰ ①モンゴル語訳『孝経』のᠴ, ᠵの中位の字形のうち、「後のᠵ」に相当するものは上向きの短い棘（ᠵ）のような字形であり「後のᠵ」とはだいぶ異なる。他方「後のᠵ」に相当するものは、棘（ᠵ）の先が垂直に上に伸びた字形である。棘（ᠵ）の先を丸く伸ばすと「後のᠵ」と類似した字形になる。①『孝経』ではᠵとᠵ（L字形の角はそれほど明瞭ではない）は文字の長短の対立が、文字を区別する特徴の一つとなっているように見える。これが、③現代のモンゴル文字ではᠵとᠵの対立とされ、角の有るᠵと角の無いᠵが文字を区別する特徴となっている。

中村：そうですね。本論にもどり、無圏点満文（厳密には「満文原檔」の無圏点満文）の c, j から、どのように有圏点新満文の c, j となったか、その経緯を確認しましょう。

無圏点満文の c, j から有圏点新満文の c, j へ

吉池：第 41 文書～第 47 文書のような有圏点新満文の影響を受けたとみられる文書の特徴は除く必要はありますが、無圏点満文（厳密には「満文原檔」の無圏点満文）が「原資料」として利用したモンゴル語文は、「満文原檔」所収のモンゴル語文に近い「世俗的な（非宗教的な）」文献であったとみて、大過ないのでしょうか。先の表 3 の c と j を再度挙げると次のとおりです。

「満文原檔」無圏点満文の c と j

有圏点新満文の ローマ字	有圏点新満文に対応する無圏点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
c			
j			

中村：c の頭位と中位の が、 を圧倒して、すべて とした、というのが有圏点新満文の表記法です。どうしてそのようなことが起ったか。おそらく、j の中位は が主であることから、c と j を明瞭に区別するため c の方はすべて で表記したということでしょう。無圏点満文の 40 年後に有圏点新満文が作られたわけですが、なかなか思い切った変更です。

次に j と y の字形について検討しましょう。

j と y の字形について

吉池：「満文原檔」無圏点満文の j と y は次のとおりです。先の表 3 によります。

「満文原檔」無圏点満文の j と y

有圏点新満文の ローマ字	有圏点新満文に対応する無圏点満文の字形		
	頭位形	中位形	末位形
j			
y			

* j の中位形 () の () は使用例が少ないことを示す。

* 本文の y の頭位形に が 1 例あるが、下記のように鉤の部分は後に書き足したような字形となっているので、除外した。



yang 漢人名（戻字檔 61a の 1 行目。228 頁）

中村：j と y の頭位形は同形とみて良いということですね。「満文原檔」所収のモンゴル語文の状況はどのようでしょう。

吉池：栗林均・海蘭(2015)の文字表によると次のとおりです。

	頭位形	中位形	
č	ᠴ ᠴ	ᠴ ᠴ	
j	ᠵ		ᠵ ᠵ
y	ᠶ ᠶ		ᠶ

中村：y の頭位形と中位形に、ᠶ と ᠶ が現れるということですね。

吉池：栗林均・海蘭(2015)の解説によると「子音字<y>には、2種類の字形が見られる。ひとつは、silbi（シルビ）で、もうひとつはその先端が上にハネている形である。先端が上にハネている字形は8回であるのに対し、silbi（シルビ）の字形（まっすぐな線）は911回現われる。」（42頁）として、頭位形の単語4例、中位形の単語2例のモンゴル文字を提示します。

モンゴル文字の ᠶ y と満洲文字の ᠶ y

中村：服部四郎(1946)¹¹と小沢重男(1997)¹²は、モンゴル文字に現れる y を表す ᠶ の字形は、満洲文字の影響によるものとしています。

服部四郎(1946)「内蒙古の文献などでは、頭位形・中位形として、満洲字母 ᠶ を用ゐる。」(14頁)。「満洲字母 ᠶ を用ゐる」との表現は満洲字母の影響によって ᠶ を用いるということでしょう。小沢重男(1997)「j と y は古く語頭において区別なく、ともに ᠶ であって、ᠶj, ᠶy の区別は有圈点満洲字(1932年、清の達海の手になる)の ᠶj, ᠶy を取り入れたものである。」(26頁)。

¹¹ 服部四郎(1946)『蒙古字入門』東京：文求堂。

¹² 小沢重男(1997)『蒙古語文語文法講義』東京：大学書林。

吉池：いずれも論拠を明示しないようですが、あるいは、服部四郎(1946)にある「内蒙古の文献などでは」が論拠の一つかもしれません。満文に接する機会の多い内蒙古では \mathfrak{r} を用いる、と読めないこともありません。

中村：頭位と中位の \mathfrak{r} y が、「満文原檔」所収モンゴル語文という資料に即してみると、どのような現れ方をするか確認する必要があるようです。

「満文原檔」所収モンゴル語文中の \mathfrak{r} y の分布

吉池：「満文原檔」所収モンゴル語文中の \mathfrak{r} y の分布をみると次のとおりです。「無し」は頭位にも中位にも \mathfrak{r} y が無い文書。数字は頭位と中位にある \mathfrak{r} y の数量。なお、参考のために先に確認した \mathfrak{c} , \mathfrak{j} の型も挙げておきます。頭位の y を持つ語が無い文書の場合は(頭位の y 無し) とします。

- 第1文書〔天命6(1621)年7月〕3行。A型。無し。(頭位の y 無し)
- 第2文書〔天命8(1623)年7月3日〕7行。B型。無し。
- 第3文書〔天命8(1623)年7月4日〕8行。B型。無し。
- 第4文書〔天命11(1626)年6月6日〕18行。A型。無し。
- 第5文書〔天命11(1626)年7月6日〕8行。A型。無し。
- 第6文書〔天命11(1626)年8月17日〕7行。A型。無し。
- 第7文書〔天聰3(1629)年10月29日〕5行。A型。有り。頭位1 yabu(3行目)
- 第8文書〔天聰3(1629)年11月7日〕6行。A型。無し。
- 第9文書〔天聰4(1630)年正月9日〕9行。A型。無し。
- 第10文書〔天聰4(1630)年2月1日〕10行。A型。無し。
- 第11文書〔天聰4(1630)年4月2日〕4行。A型。無し。(頭位の y 無し)
- 第12文書〔天聰4(1630)年4月4日〕7行。B型。無し。
- 第13文書〔天聰5(1631)年正月13日〕4行。B型。無し。
- 第14文書〔天聰5(1631)年4月7日〕9行。A型。無し。
- 第15文書〔天聰5(1631)年4月12日〕30行。B型。?無し。微妙な例が1つ。yeke(4行目)
- 第16文書〔天聰5(1631)年4月11日〕9行。【その他】。無し。
- 第17文書〔天聰5(1631)年4月11日〕4行。A型。無し。(頭位の y 無し)
- 第18文書〔天聰5(1631)年4月20日〕3行。A型。無し。
- 第19文書〔天聰5(1631)年7月5日〕5行。A型。?無し。微妙な例が1つ。yeke(4行目)
- 第20文書〔天聰5(1631)年7月5日〕6行。B型。無し。
- 第21文書〔天聰5(1631)年7月5日〕5行。A型。無し。
- 第22文書〔天聰5(1631)年7月5日〕3行。A型。無し。
- 第23文書〔天聰5(1631)年7月9日〕6行。A型。有り。頭位1 Yangsimu(6行目)

- 第24文書〔天聰5(1631)年7月9日〕7行。A型。無し。
- 第25文書〔天聰5(1631)年7月9日〕3行。A型。無し。(頭位のy無し)
- 第26文書〔天聰5(1631)年7月19日〕11行。A型。無し。
- 第27文書〔天聰5(1631)年11月19日〕11行。B型。無し。
- 第28文書〔天聰5(1631)年11月28日〕6行。【その他】。?無し。微妙な例が1つ。yabuqula(4行目)
- 第29文書〔天聰5(1631)年12月11日〕3行。【その他】。?無し。微妙な例が1つ。yabuba(1行目)。栗林均・海蘭(2015)は𐰺とする。
- 第30文書〔天聰5(1631)年12月21日〕11行。【その他】。有り。中位2 Sayang(1行目)、Bayari(2行目)。後者は微妙な例であるが栗林均・海蘭(2015)は𐰺とする。
- 第31文書〔天聰6(1632)年正月3日〕10行。B型。無し。
- 第32文書〔天聰6(1632)年正月24日〕12行。A型。無し。
- 第33文書〔天聰6(1632)年正月18日〕22行。【その他】。無し。
- 第34文書〔天聰6(1632)年2月2日〕6行。A型。無し。
- 第35文書〔天聰6(1632)年3月27日〕4行。A型。無し。
- 第36文書〔天聰6(1632)年3月29日〕3行。A型。無し。
- 第37文書〔天聰6(1632)年4月6日〕8行。【その他】。有り。頭位1 yabu(1行目)、中位1 ayan(1行目)。ただし中位の例は本行のものではなく行間の注記。栗林均・海蘭(2015)は中位𐰺の例とする。
- 第38文書〔天聰6(1632)年10月5日〕47行。B型。有り。頭位3 yala(19行目)、yala(23行目)、yalai(38行目)。
- 第39文書〔天聰9(1635)年5月27日〕10行。【その他】。無し。
- 第40文書〔天聰9(1635)年5月27日〕11行。A型。無し。
- 第41文書〔天聰9(1635)年7月24日〕9行。【その他】。無し。
- 第42文書〔天聰9(1635)年12月7日〕11行。B型。無し。
- 第43文書〔天聰10(1636)年2月2日〕9行。【その他】。無し。
- 第44文書〔天聰10(1636)年2月2日〕3行。【その他】。無し。
- 第45文書〔天聰10(1636)年2月2日〕3行。【その他】。無し。
- 第46文書〔天聰10(1636)年2月2日〕3行。【その他】。無し。
- 第47文書〔天聰10(1636)年2月2日〕2行。【その他】。無し。(頭位のy無し)

𐰺 yの分布が意味するもの

中村: 文書ごとの分布によって有圈点新満文の影響を探ろうということですね。先に検討した「満文原檔」所収モンゴル語文の第41文書～第47文書のč, jの表記法は、有圈点新満文の影響によって生じたとしても無理はありませんでした。𐰺 yについてどうかというと、第41文書～第47文書には見られません。有圈点新満文が作られたとされるのは天聰6(1632)年正月で、𐰺 yはそれ以前の年号の資料に見えます。この一覧表では、有圈点新満文の影響

を論ずることはできそうにありません。

吉池：有圈点新満文が作られたとされる天聰 6(1632)年以前の年号が付された文書が、天聰 6(1632)年以降に再度書写されたということはありません。その再書写のうちに有圈点新満文の書法の影響を受けた書き手が、ついつい ㄣ y としてしまったということかもしれません。満洲字母 ㄣ の影響かもしれない、ということについては今後の課題としておきましょう。

中村：それでは今回はこれまでとして、次回は外国借音用の文字について検討しましょう。